

比較文学・仏文学者故大塚幸男教授著『比較文学原論』と比較文学研究論考（没後25周年に寄せて）

慶田，稔
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1909545>

出版情報：Comparatio. 21, pp.15-29, 2017-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

比較文学・仏文学者 故大塚幸男教授著『比較文学原論』と
比較文学研究論考（没後25周年に寄せて）

廣田 稔

年月は流れて久ししかすがに
忘れぬやもかの夏の日を

とく起きて ^{ふみ}書は読まむ

物や書かむ

ありがたきかな

「日の要求」*は

大塚幸男

* 'Die Forderung des Tages' (ゲーテ)

日本を代表する仏文学者、並びに比較文学者の一人、故大塚幸男教授没後25回忌を迎えるに際し、執筆者私蔵のもの、国立国会図書館を初めとした公立図書館所蔵によるもの、大学紀要掲載の多数の論文も含め、同教授の幾多の著書、研究書、翻訳書、フランス語文法書、対訳書、歌集をあらためて繙く機会を得ることとなり、同教授の膨大な業績に対して深甚の敬意と讃嘆の念を抱かずにはいられない。と同時に、これら数々の研究書が、フランス文学分野上のみならず、比較文学研究分野にいかにも多大且つ貴重な研究の方法論、実践法への示唆を与えるものであるかを認識させられる。その意味においてこの小論は、単に個的回想録としてではなく比較文学研究論考であることを明記したい。

同教授の研究業績は単に膨大であるのみならず、その研究の裾野の広大さに驚嘆させられるのはその研究が洋の東西を問わず古今の文学に及んでいることによるものである。その、広大さは同教授の専門とするフランス文学は言うに及ばず、大著『ヨーロッパ文学主潮史』がロシア文学を含めたヨーロッパ文学全般の詩人、小説家、劇作家を網羅して、余す所なく検証、分析し、ヨーロッパ文学の主潮と歴史を刻銘に論述、評価していることによつて実証されている。のみならず、日本文学の古典から明治、大正、昭和の新しい日本文学を担う作家群像、そして、それらの作家たちが受容し、影響を受けたヨーロッパ、特にフランスのモラリストたちの文学について正鵠無比にして精密な批評と洞察に基づく比較考證がなされていることを知ることができる。

それらは『フランスのモラリストたち』『フランス文学随縁録』『近代フランス文学論攷』『流星の人モーパッサン』という著作にも結実した。さらには、比較文学視点によって、焦点を個々の作家像に絞って検証するという形によって、我が文豪島崎藤村文学論としての『花咲く桃李の陰に』又、英国作家ジョージ・ギッシングの『ヘンリ・ライクロフトの私記』を分析論じた随想録『閑適抄』に見事如実に実証されている。藤村論においては彼の4年に亘るフランス遊学によって受けたモーパッサンの影響等が記され、彼の文学がフランスの旅の日にあった文豪自身と不即不離の関係にあったことが詳らかに論述されている。且つ、そのような文学論は個別的に芥川や荷風にも及び、彼らが受けたアナトール・フランスやモンテーニュの影響について論じる他、英国の四季折々における文人ギッシングの人と人生、そして、その文学思想に基づく人生観をつぶさに検証し、論述しながら著者自らの文学と人事への豊かな知的随想録として昇華したものである。文人ギッシングの文学観、人生観の精髓を深々と掘り下げて論じた比較文化論の展開、考證は著者自らの日本精神考證の哲理的思念と結びついて、稀代の比較文学者にして翻訳家ならではの識見に溢れ、読む者の心に深い感動を覚えさせずにはおかない随想となっている。この書によって単にギッシングという英国の詩的文人についてのみならず、日本の作家、詩人との関連を引き合いに出すことによってこれも又、比較文学研究の見事な例を提供している。

さらに、芭蕉や西行といった日本古来の文人たちをも引き合いに出すという、比較文学、文化考證研究の識見の横溢した例となっている。又、多数の論文中にはラフカディオ・ハーン研究論もあり、我が国の比較文学者が研究対象として取挙げられる限りのものが、その先鞭をつけられていると言うべきである。

このように、大塚教授の世界文学研究、比較文学研究は日本を代表する研究者として教授の存在価値がいち早く衆目の認めるものであったことは以下の事実によっても明らかである。

1965年当時、「日本文学が世界文学の一環として広く認められるに至りつつ」欧米で「文学事典や世界文学史に、わが国の主な作家および作品が取り入れられ」ていることを紹介する中で、特に「全世界にわたるノーベル賞受賞クラスの一流作家たちの略伝集」(*Les Écrivains contemporains*, Editions d'Art Lucien Mazenod, Paris, 1965)が上梓された折、その中で日本文学関係の項目は三項目であり、「現代日本文学概観(白井浩司執筆)」、「谷崎潤一郎」(シーフェール)と並び大塚幸男執筆の「川端康成」であった。この一例によっても、日本における研究者を代表する一人として、日本文学を世界に紹介する役割を担っていたと言えよう。我が国最初のノーベル賞受賞作家川端康成を夙に世界に紹介した先見の明と共に、大塚教授の日本文学を世界文学の一翼に引き上げる上での貢献は特筆すべきではなからうか。周知の如く川端のノーベル賞受賞は1968年であり、大塚教授による世界文学への川端紹介はその3年も前のことであり、川端文学が世界の注目と脚光を浴びる一端は大塚教授に負うものであった可能性を指摘するのはあながち過言ではないで

あろう。フランス文学のみならず、世界文学そしてとりわけ比較文学研究の泰斗である証左に他ならない。

大塚教授の業績はフランス文学、比較文学、翻訳、その他文学と語学全域に至ることは既述の通りであるが、その中で幾多の翻訳の一つ、1958年、文庫クセジュの『文学の社会学』*La sociologie de la littérature*（ボルドー大学教授、国際比較文学連盟副会長ロベール・エスカルピ著）によって大塚教授は〈文学社会学〉なる学問の確立がなされたことを指摘するが、『文学の社会学』の端的な特色は、これまでの文学研究が主として作家およびその作品に証明を与えるだけで、それ以外のものはこれを闇の中に放置していたきらいがあったのに対して、作者と並んで文学事実を構成する要素の一つとしての読者との関係はどのようなものかという問題に接近するために、その出発点として発表（公刊）という行為の意味を解明した点にあるというものであった。この文学と社会との係わりへの指摘は単に翻訳の分野に対してのみならず、大塚教授のフランス文学、比較文学研究その他の分野に対しても等しく通じるものではないかと言えるであろう。大塚教授の仏文学のみならず、比較文学研究の研究史や幾多の翻訳作業は実に「文学の社会学」の発表と言う形での実践そのものであって、世の人々にそれらのものを発表提示することによって研究者は言うまでもなく、読者たる人々を啓発して学術的、文明批評を行ってきたと言える。「文学作品は最初の買い手に渡り、最初の読者を持つに至ってこそ、その文学的創造が完成する」ものであり《物を書くことと読者とは、同一の文学事実の両面》としてあり、サルトルが評したように「精神の作物というあの具体的、想像的な文学像を顕現させるものは、著者と読者との二つの一組になった努力である。」と論じて、大塚教授の比較文学研究は洋の東西における文学創作及び文学研究の意義を明確にし、又翻訳作業全てによってもあらためて示唆している。このような意味を含めて大塚教授の業績をあらためて振り返る作業が世の研究者へ与えられた貴重な指針ともなるであろうことを確信するものである。

さらに加えて論じるのは、ギュスターヴ・ランソンの『方法・批評・文学史論集』（1965年、全479ページ）の社会学と文学史との密接な関係に言及してのものであるが、そのことを意識することは「われわれの〔文学研究という〕任務からそれで野心的な空論へと走るためではなく、われわれの正確な任務をよりよく、より完全に、より微妙に果たすためである」というランソンの見識を紹介し、〈文学社会学〉という学問伝統がフランスにあり、そしてこの問題を突きこんで早くから考えていたランソンがいたがゆえにこそ「〈文学社会学〉がフランスに生れたのは理由のないことではないということを指摘し、それを証明したいと思った」と自らの研究の意図を説いている。ここに大塚教授における文学研究の礎地土台がいかにも、フランスにあったかということも知ることができる。つまりは、ヨーロッパにおける研究の視点が大塚教授の仏文学、比較文学、又、日本文学に対する姿勢に反映されていたのではないかと推論するものである。

上記のような見地に立って、比較文学研究理論の集大成と称すべき『比較文学原論』を読み解くことができようが、この比較文学論はまさに博覧強記の圧倒的学術的識見に溢れ

た著述であり、膨大緻密な資料に基づき、日本における初期研究から海外、ヨーロッパに於ける研究動向の詳細綿密な情報を提示し、そのそれぞれに対して解説は言うまでもなく、独自の問題点指摘によるあるべき方向性の分析、学術上の理論展開と様々な提言を行った比較文学研究のバイブルと称しても過言ではない。この書は外国においても、筆者は未見ながら中国語訳も聞き及んでいる。著者の視野は日本は言うまでもなく、広くヨーロッパ全般に及び、著者の専門分野のフランス文学のみならず、イギリス文学、ロシア文学への検証論述がなされる一方、マルクス主義文学研究、さらには東欧における比較文学研究の動向とその意義についても詳らかにして、世界全般における比較文学論である。

冒頭において、この学問がフランスにおいて起ったこと、「比較文学は、一言にしていえば、国際間の文学交流の研究を対象とする学問である」と記し、この著はその「根本原理と諸問題とを考え直し、またその方法を示そうとするものである。」とその主旨を提示する。比較文学は世界的に、とくにわが国において盛んになっているが、「日本人の手に成るかかる総合的原論はまだ出ていない」し、わが国の比較文学研究者の方法と研究テーマが極めて限られているような感があるため「この学問の新しい道しるべとして、その視野の拡大と深化のために」著し出したものであると宣言している。この宣言に違ふことなく、この著作は比較文学研究の根幹を徹頭徹尾追求した明解、精密な論及となされている。

比較文学が元々フランスに発祥したことは既述の通りであるが、ビシュワとルソーの比較文学定義に基づけば、比較文学とは《文学を人間精神特有の機能としてよりよく理解するための、歴史と批評と哲学とによる諸言語間あるいは諸文学間の文学諸現象の分析的叙述、方法的、示差的比較、および総合的解釈》というものであり、それこそが「比較文学の最新の到達点であろう」と定義付ける。

外国文学の研究は必然的に比較文学的とならざるを得ないものの、日本における研究者にとって肝要なのは「日本人の感覚と日本人としての視点から読む」ということであって、英、仏、その他諸外国の研究者の手になる研究文献の渉獵だけで事足りるということではその研究者の存在価値はない。そして比較文学的視点から行う研究に使命を自覚しなければならず、その比較文学的志向は国文学者にとっても等しく認識されなければならないとして、著者は文豪ゲーテのかの有名な箴言を引用する。“*Wer fremde sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.*”「外国語を知らない者は自国語も何も識らない」という言である。

この言を押しひろげて言えば、国文学を識らない外国文学者というのはあり得ないというものである。このことは人間精神の魂の主要な能力は比較することであるというモンテスキューの精神論に通じるものでもある。その〈比較〉の概念に「対比」と「比較」との二種類がある。この範疇には具体的な影響関係がなかった任意の二人あるいは数人の作家についてではなしに、外国作家の思潮に多少とも学んだことのある作家についての外国の材源とそれによる影響の解明を主たる任務とする学問というものである。その例として、フランスの日本学者ルネ・シーフェールによる谷崎潤一郎の『陰翳禮讃』が美の日本的概

戒』がドストエフスキイの『罪と罰』の影響を受けているものの、『破戒』が歴史的な作品となり得たのは部分的に影響を受けながらも『罪と罰』とはちがった変化を打出しているからであり、影響は《反応〔反動〕や変化を起こさせる》ものであり、それゆえにこそ実り多いものであることを忘れてはならないというものである。藤村はフランスへの遊学を行うことによってフランス文学の影響を受けたのであるが、ロシアにおいてもドストエフスキイ、トルストイ、トゥルゲーネフなどの小説にフランス語が頻出していることが示すように、ロシアにおいてもフランス文化の影響が圧倒的であったことが指摘されている。

上記のように、文学を理解する上での基礎となるのが《個人的直観》であることの指摘であるが、比較文学の考察研究においては比較する作家同士の文学修業遍歴を検証することが不可欠であることは論をまたないことであろう。その点に関して大塚教授は以下の6点を挙げている。

(1) 作品の熟読 (2) 作家の日記、創作ノートの検索 (3) 読書歴 (4) 作家の交友関係、友人知己への手紙 (5) 作家の外国旅行とその旅行記 (6) 作家の時代に輸入された外国文学等の原書。

上記6項目についての検証考察が比較研究の根幹に据えられるべき基礎であることを指し示すものである。この6つの検証項目を十分に行って初めて、比較文学研究そのものが成立つ意味を持つことへの貴重な指唆であると言わねばならない。その一つ、作品の熟読の例として、大塚幸男随筆集『花のある窓』の中で、芥川龍之介の一文を紹介した例がある。それは、有名なギリシアの医聖ヒポクラテスの言葉《Ars longa, vita brevis》について、この箴言が日本では《芸術は長く、人生は短し》と訳され、芸術の生命は長い、人生は短いという意味に一般に解されている。ところが芥川は「《アルス》とは本来、技術のことであり、転じて学問芸術をも意味する。ヒポクラテスは、医術(学問、芸術)の道を極めるのは長い困難な仕事であり、短い人の一生ではなかなか達成しがたいものである、といおうとしたのである。」と。もっともこの例においては一般に把握されているように《芸術の生命は長い》ととって差しつかえはあるまいことは併せて付言してはいるものの、芥川を深く読みとどめた例を示している。芥川の文体とその表現について、彼が《表現と人は一なりとは真なりと思ふ》という、旧友恒藤恭宛ての手紙に記した一文を引用し、そして又《文体は人そのものである》という(ビュフォン)の言葉を引き合いに出して「芥川の文体もまた、彼自身の人——人間を、さながらに表している」と論じる。さらには芥川がアナトール・フランスに触発されていることを自ら露呈していること、そして芥川がアナトール・フランスの短編「バルタザール」を翻訳したことに関して、「さすがに偉大なスタイリスト芥川の名に値する感歎すべき名訳である。まことにアナトール・フランスは芥川の「お師匠さん」(大佛次郎)であった。」と論評し、アナトール・フランスと共にメリメをも英訳で読んだことによって、「芥川は歴史小説の構想においてはアナトール・フランスに構成の技法についてはメリメに負うところが多い。」と論じている。

さらに荷風とフランス文学の関係論において「荷風はあらゆる近代日本の作家の中でも、

念の書とすすめることが谷崎に対する正しい敬意の表し方であるとしている例を挙げている。又、比較的には国籍を異にする二人ないし数人の作家比較の例として「近松とシェイクスピア」「西鶴とジェームズ・ジョイス」といった研究も新しい役割を担うとする。比較文学研究は日本は言うまでもなく各国でなされているが、研究の国際的視野に関する論究は『比較文学原論』第5章に見られる。例えば比較文学は国境を越えての文学の研究であるとする点ではフランス学派そしてアメリカ学派も一致していながらも、両派の間にこの定義の適用の点での相違についての論述は、比較文学研究の理解にとり極めて示唆に富む。この言に関する著者の見解は「要するにフランス学派は、できるだけ実証的たらしめんとする」に対して「アメリカ学派の特徴はフランス学派的な実証研究（厳密な意味での比較文学）のほかに、対比の方法を取り入れるところにある」。そして「このような対比研究と比較文学の方法をこもごも応用して、見事な効果をあげているのがラフカディオ・ハーンの文芸批評である。「文芸批評家」としてのハーンの実績が、かつて『日本英文学の学統』の一章をささげられた矢野峰人博士のハーン称揚の一節によって記述される。博士がハーンをアナートル・フランス、モーパッサン、ゴーティエ、ジョルジュ・サンドに比し、ディッケンズをドーデーにたとえ、スウィフトとフローベール、ラスキンとトルストイとの比較について論評されていることを指摘する。このように、ハーン『近代イギリス批評と現代英仏文学の関係』という著述の表題が示すように、英国批評におけるフランス文学との関係を示し、又、他例を示し出して在来の英国における批評に新しい方法の導入による「文学的寛容」という巨視的新精神が生まれたことを論述している。

一方、ヨーロッパにおいては18世紀から19世紀に一国文学の究明に際しても外国文学との関係が無視できぬものとなって比較文学という新しい学問の発生を促すこととなった。そのことがヨーロッパの領域にギリシア・ローマの古代文学が古典主義文学に最も深い影響を与え、明治以降に欧米文学の絶大な影響を受けることとなったとの指摘であるが、我が国がとりわけ欧米の文物、文学を取入れることに最も熱心であったことによって、特に影響関係を重視するフランスに触発されて、比較文学をいち早く取入れ、世界有数の比較文学国となっていると概観される。

このような比較文学の歴史は、ボル・ヴァン・ティーゲムの『比較文学』が、又、我が国において島田謹二教授による『近代比較文学』『日本における外国文学』さらに又、ボルドー大学ロベール・エスカルビ教授の『諸国文学の歴史』が夙にその歴史を詳にするものであるが、エスカルビ教授により著者は直接その著書を贈られたものであり、著者にとって従来になかった貴重な文献であった。

『比較文学原論』第三章は影響とその諸問題を扱うもので、特に国文学に及ぼす外国および外国文学の影響の重大な意味を深く考究したランソンの例を取挙げて、ランソンが文学の職能が科学が到達し得ない内的精神的領域にあること、即ち、文学を理解する上での基礎となるのが《個人的直観》であることへの論証を行っている。例えば、藤村文学の『破

フランス文学を最も多く原典で読み、文字どおりフランス文学によって育てられた人」と評し、荷風のモーパッサンへの敬愛と理解の深さのほどは「モーパッサンの石像を拝す」の一文に尽くされ、「荷風がフランス語を学ぼうと発心したのもモーパッサンを原語で味読しようがためであった」と解説。又、『近代フランス文学論攷』に「永井荷風とモーパッサン」を参照すれば荷風が単に技法上だけのものばかりでなく、生活的精神的思想的にもいかに大きな影響を受け、いかに共感し傾倒していたかと評している。荷風はモーパッサンのみならず、ゾラに学び小説における季節感の重要性を学んだと考えられ、ロチを愛読したとして、荷風の死の床にロチの「死と憐みの書」が置かれていたこと、そして、アンリ・ド・レニエも又、荷風の最も深く傾倒した詩人であったとも、荷風におけるフランス文学との奥深い係わりが藤村のフランス文学との係わりの例と共に圧倒的説得力をもって記し得ている。フランス文学を深く読み解き通曉した大塚教授にして可能なことであつたと言わねばならない。

『花咲く桃李の陰に』における藤村論には、藤村の「新片町より」以前から藤村の感想集がモンテーニュの『隨想録』に近いものであり、「西欧の作家の言葉が縦横に引用されており、またそれらの作家の作品についての読後感や批評がしばしば出ている」と指摘がなされている。《欧羅巴から学ばねならない。そして自分等の内部にあるものを育てねばならない》『海へ』と述べる。このような藤村によってなされたヨーロッパの文人たちとの接触やその知識についての論評は、自らそれらを自家薬籠中のものとしてその著作、随筆、翻訳を通して実践した者でしかなし得ないものである。芥川が「人生は落丁の多い書物に似ている」というのも実はボードレールの《一つの人生はいかにもちぐはぐなものであらうとも（その人の）人間としての統一はそのために乱されることはない》（『人工楽園』）に暗号していて、「芥川がボードレールを愛読していたことは言うまでもない」と論じ、芥川の「瑣事」という箴言断章も『エピクロスエピクロスの園』の「官能的人間の支払うべき代償」に似ていると指摘して、芥川が「文壇に珍しい読書人であり、稀代の書巻の人であつた」と。このように評する著者の見解に、深く読むということへの最たる実践例を眼の当りにするものである。大塚教授の論は芥川に限らず、古今東西の万葉、芭蕉は言うに及ばず、芥川、藤村その他日本の文人たち、ロシアや英国の文人、ギッシングを見事に論じた『閑適抄』そして、アナトール・フランス、モンテーニュ、パスカル、その他のフランス文人たちについての読みと解釈等、枚挙に暇なく大塚教授も又《稀代の書巻の人》であつた。

国民文学という概念の最初の確立者はドイツのヘルダーであつたが、それはそれぞれの国の風土・民族・文明と緊密な関係にあることの指摘にあつた。具体的には早くも16世紀のフランスにおける文人たちのイタリア文学の圧倒的影響からの解放となつた国民文学への目覚め、又、日本においての儒学、儒教又仏教への対抗意識から生まれた本居宣長らの国学の樹立等に見られるものであつた。日本文学史の特色として日本文学と西欧文学との対比論として、近くはドナルド・キーン教授の『日本文学史』があるが、欧米、特にフ

ランスにおいては次々に新しい国文学史が刊行されているのに比して、我が国の国文学者の文学史が稀な点に日本の国民文学的教養の向上を阻害している点を指摘する。その一因は文学史が細部に精通すると同時に、起源から現代に至る一貫した全体の流れを総合的・巨視的に大観する才能にめぐまれた学者によってでなければ書けないものであるからと論じるのであるが、このような稀代の才能にめぐまれたという点では、著者はまことにそのことを、この『比較文学原論』又、『ヨーロッパ文学思潮史』によって単に一国における文学史にとどまらず、ヨーロッパ各国の文学を網羅している点においても証明している。

一方、「世界文学」というのは文豪ゲーテの造語に始まる。エッカーマンとの対話においてゲーテは、も早国民文学というものより、「世界文学の時代がはじまっているのだ」と論じ、その模範とすべきものとして「古代ギリシア人のもとにさかのぼってみるべき」としたものであるが、このギリシア人讃美はアナトール・フランスの『花咲く日』の一節とも酷似しているものであり、諸国民がその精神上的の独自性と財宝を文学によって交易するという意味で世界文学と称され、それが民族間の会話として、国民文学により民族相互の理解を深め、自らの文学価値をさらに深く知ることによって寄与すると考えられている。

そして、ゲーテの偉大さは世界文学を打ち立てる手段と方法とを自ら探し実践している点にあることを評価して、ゲーテが実践した方法に〈翻訳〉と〈批評活動〉そして〈旅行〉であったと記す。

この小論の筆者として、ゲーテの実践法の3つはいずれも大塚教授がまさに長い研究活動の中で実践したことそのものであるという感を強く覚えるものである。そのことは幾多の翻訳書、研究著書又、ヨーロッパ各地、とりわけこよなくフランスを愛して、『花咲く桃李の陰に』や『フランス文学風物誌』の中に香り高く美しい、文学論と称すべき旅日記において見事に著し出されている。

『比較文学原論』第八章では翻訳者と翻訳についての基本的概念についての論究であるが、「翻訳者は個人的媒介者の最たるものであり、翻訳の研究は比較文学において最も重要な位置を占める」ことによるものである。ゲーテが翻訳の効用を高く評価し、自ら世界文学を打ち立てるためになした実践の一つとして翻訳活動があった。わが国における翻訳に目を移す時に、「その最大の功労者は、いうまでもなく鷗外であった。」鷗外の幾多の翻訳によってヨーロッパの文学が日本に開かれ、日本文学が世界の潮流と結びつくことができるようになったという確固たる歴史的事実であるが、翻訳によってこそ、原典のみでは広く世界に拡がらない文学が初めて根を下すことができるということは論を待たない。即ち、一例としてモンテーニュにおいても「いたずらに原典に執着して、あやふやな外国語の力によるよりも、信頼すべき翻訳で読んだほうがよいというのが彼の意見であった」というものである。

日本における翻訳は明治、大正そして昭和を通じての幾多についての詳述は『比較文学原論』後半での「明治初期」（1878年）に出たジュール・ウェルヌ原作、川島忠之助の

『新設八十日間世界一周』であることの紹介を初めとしてなされている。上述のように鷗外による翻訳こそその模範とすべきものであったが、大塚教授も、常々外国文学を学ぶ者はよく日本の文学を知らねばならないことを筆者にも助言してくれていた。このことはまさしくゲーテによる《外国語を知らない者は自国語も何も識らない》というあの至言と軌を一にし、外国文学の視座からの日本文学観照が原点にあらねばないことを意味していたと思われる。このような信条によって、教授は類稀れな翻訳者として枚挙に暇なき精密極まる数々の翻訳をなしたのである。

「翻訳をすることは外国文学者の第一の使命である」とその随筆「翻訳の窓辺から」の中に述べ、真実の翻訳者の資格というものに厳しく徹していた。その資格とするものの根幹こそ鷗外の示した五箇条であった。曰く「第一に外国語に精通せる事。第二に国文に堪能なる事、第三は思想の豊富なる事、第四は詩人なるべき事、第五は専門の作者なる事」であった。この鷗外による五箇条は大塚教授の遺した数々の翻訳書の中に見事に実践されている。そのいくつかの例は後述の業績目録の中に示されるようにであるが、ニコラ・セキユールの『知性の愁い』、アベル・ボナール『友情論』ピエール・デュラン『人間マルクス』、エリク・ド・グロリエ『書物の歴史』、パンジャマン・コンスタン『アドルフ』、アナトール・フランス『エピクロスの園』、アベル・ボナール『聖性の詩人フランチェスコ』等々である。

ゲーテが推奨する旅の効用については、ゲーテ自らのイタリアへの旅についての論もさることながら、とりわけ藤村におけるフランス遊学が、彼における外国文学吸収の刺激が、彼の文学に大いなる影響があったこと、フランス文明の特質を批判することなく、よく知ろうと理解すること、フランス人を知ろうと心がけること、そしてヨーロッパについてよく知ろうと念ずることが藤村の終始変らぬ態度であったと論じる。それは高田博厚による藤村評にあるように「その文学創作態度に西欧文学から受けた感銘を崩さず、転位させずに真正直に持ち込んだ人である」とし、大塚教授自らこれは「藤村のフランス紀行の独自性の本質を衝いたものである。」と論じたのであるが、この藤村のフランスへの旅の意味は「旅の日の藤村」（『比較文学原論』）やとりわけ『花咲く桃李の陰に』に詳述されている。このような形で、大塚教授自らの随筆集『花のある窓』そしてとりわけ『フランス文学風物誌』において、自らのフランスへの旅が深くフランスの文人たちへの限りなき敬慕の念をもって綴られていることを併せて記しておかねばならない。又、様々な場所への旅の日々の感慨は随筆集『花のある窓』に感銘高く記されているが、そのような数多い回想記の中で、筆者にとってとりわけ印象深いものの一例を挙げれば、ルソーの眠ったフランスの中で最も美しいといわれるエルムノンヴィル（Ermenonville）の旅の日の記述である。この美しい森にルソーの墓（遺骸はパンテオンに移された）と共に《女王のベンチ》と称するものがあり、これは1780年6月薄命の女王マリ・アントワネットがエルムノンヴィルの娘たちの歓迎を受けた歴史的ベンチという。この森を著者が訪れた時、この森の美しいたたずまいに感激した一人の老婦人がこのように声をかけてくれたと言う。“Les petits

oiseaux sont heureux ici!”《小鳥もここではしあわせですわね》と。

この小論、比較文学者、フランス文学者として故大塚幸男教授の研究業績について記した拙文は同教授の膨大な業績のごく一部についてのものに過ぎず、又、紙数の制限もあり、到底記し足り得るものではない。しかしながら、比較文学研究の真のあり方、その本質とは何かについてあらためて考えてみる上で、同教授の遺したものは比較文学研究者にとって、類稀れにして貴重な示唆に富む資料と確信するものである。このような拙文が筆者の私的印象記に墮してはならない。そのことに鑑み、教授に対する学界その他多くの評価の一例として、かつて瀬戸内寂聴さんの『愛と別れ』の中での故人の翻訳したコンスタンの『アドルフ』に関する以下の一節を結びとして記したい。

「もし、突然、何かの事情で、すべてを投げ捨て、どこかへ逃亡しなければならないとしたら、やっぱり、本の一冊ぐらいいは手にさげる荷物の中に加えたいだろう。その一冊を何にするか…。(中略) そうだやっぱり『アドルフ』の一冊をスーツケースに最後に投げ入れよう。その本はいつでも私の仕事机のはしっこに乗っている。…(中略) 仕事に疲れきった時とか、気分が屈して晴れない日などに、私は思いついて、ごそごそと紙の山の中から、その一冊を探し出す。」…。寂聴さんは『源氏物語』訳解説の中や『寂聴 美の宴』にも『アドルフ』を引合いに出されている。

以上のように故大塚幸男教授は国内外の研究者やフランスにおける最も著名な文人たちとの交流に加え、オランダ ユトレヒト大学における国際比較文学連盟会議に日本代表の一人として出席し、「日本におけるフランス文学／その翻訳と影響」の報告など、日本国内のみならず、高い国際的評価を得た。その学術文化上の貢献によって、1976年3月フランス政府(文化省)よりアカデミー勲章(オフィシエ) **Officier des Palmes Académique** を贈られていることが、その特筆すべき証左であり、文豪島崎藤村や永井荷風からの故人宛ての葉書類や日本比較文学会の泰斗、島田謹二教授等との交流など、枚挙に暇なきことを付記しておきたい。

大塚幸男（1909－1992）

著書

- 『フランス文学随攷』 1946年7月、あけぼの社
文学評論集『知性と感性』 1947年4月、南風書房
「ジュウベエル」「ルナン」（『サント・ブウヴ選集』第四卷十九世紀作家論・上） 1950年
1月、実業之日本社
『仏文学入門』 1951年8月、養徳社
『フランス文学入門』（『仏文学入門』の増訂版） 1955年2月、河出書房
『女は生きる』 1957年1月、河出書房
『活用フランス文典』 1957年2月、白水社
『フランス文学風物誌』 1958年8月、白水社
『フランス文学小史』 1958年5月、大宮書房
『フランス語への招待』 1960年4月、大学書林
『世界文学史の中で見たフランス文学史一起原から現代まで』 1960年10月、白水社
『写真・フランス文学史』 1962年4月、社会思想社（現代教養文庫）
『ヨーロッパ文学主潮史』 1963年10月、白水社
“Yasunari Kawabata”, in *Les Écrivains contemporains*, Éditions d'Art Lucien Mazenod,
Paris, 1965.
『明解フランス文典』 1966年2月、白水社
『比較文学』 1966年4月、福岡大学研究所
歌集『白きやまかひ』 1966年6月、私家版
『フランスのモラリストたち』 1967年5月、白水社
歌集『ひと日われ海を旅して』 1967年12月、私家版
『美しいフランス語』 1970年4月、朝日出版社
『アルフレッド・ド・ヴィニ―その生涯・その作品』 1971年10月、白水社
『比較文学―理論・方法・展望』 1972年2月、朝日出版社
『花咲く桃李の蔭に―モラリスト・島崎藤村』 1972年8月、潮出版社
『近代フランス文学論攷』 1973年3月、朝日出版社
『やさしいフランス語』 1973年4月、朝日出版社
『現代フランス語基礎』 1974年3月、朝日出版社
「日本におけるフランス文学」（『欧米作家と日本近代文学』第二編） 1974年10月、教育
出版センター
『流星の人モーパッサン―生涯と芸術』 1974年10月、白水社
『閑適抄―ギッシングとともに』 1975年10月、第三書房
『フランス文学随縁録』 1976年9月、第三書房

『比較文学原論』 1977年6月, 白水社

『花のある窓—大塚幸男随筆集』 1978年3月, 第三書房

『モラリスト涉獵』 1979年11月, 第三書房

訳書

アナトール・フランス『追憶の薔薇』(原文対訳) 1932年12月, 白水社

アナトール・フランス『わが友の書』 1934年5月, 第一書房

バンジャマン・コンスタン『アドルフ』 1935年4月, 岩波書店(岩波文庫)(改訳新版, 1965年8月)

アナトール・フランス『花咲く日』 1937年10月, 第一書房

ギ・ド・モーパッサン『初雪』(原文対訳) 1938年2月, 大学書林(改訳新版, 1968年1月)

ピエール・ロチ『青春』 1939年11月, 白水社

アベル・ボナール『友情論』(矢野常有共訳, のち単独訳) 1940年, 白水社(改訳増補版, 1964年9月)

アンドレ・モロワ『ツルゲーネフ伝』 1941年6月, 河出書房

アナトール・フランス長篇小説全集第十巻『ジャン・セルヴィヤンの願ひ』 1942年5月, 白水社

アンドレ・モロワ『美しき結婚』 1946年, 九州評論社

オノレ・ド・バルザック『恋の幸福』 1946年11月, 九州評論社

アンリイ・ボルドオ『野火』 1946年12月, 矢代書店

オノレ・ド・バルザック『マラナの母と娘』 1947年8月, 出光書店

ジャック・シャルドオヌ『恋愛・結婚・夫婦—小説家の随想』 1947年1月, 九州評論社

モーパッサン短篇集『幸福』 1947年4月, 出光書店

モーパッサン短篇集『初雪』 1948年1月, 紫金書房(のち改訳新版, 1968年1月, 大学書林)

バンジャマン・コンスタン『アドルフ』 1948年2月, 丹頂書房

サン・シモン『ジュネーヴ人の手紙』 1948年3月, 日本評論社

ヴォーヴナルグ随想録『情熱の倫理』 1948年11月, 養徳社

ジュウベエル随想録『思想は魂とともに』 1949年1月, 養徳社

フランスの箴言『恋愛・結婚・女性』 1950年7月, 角川書店(角川新書)

スタンダール『ヴァニーナ・ヴァニーニ』(原文対訳) 1951年9月, 白水社

ポッジョ・ブラッチョリーニ『風流道化譚』 1951年1月, 鹿鳴社

ピエール・ロチ『死と憐れみの書』 1952年4月, 白水社

マルセル・グリオール『世界の探険家』 1953年1月, 白水社(文庫クセジュ)

シャルル・ヴァグネル『簡素な生活—一つの幸福論』 1953年9月, 白水社(のち講談社学

- 術文庫, 2001年5月)
- オクターヴ・オブリ編『ナポレオン』(手紙と語録) 1953年11月, 創元社(永遠の言葉シリーズ)
- エリック・ド・グロリエ『書物の歴史』 1955年8月, 白水社(文庫クセジュ) (改訳新版, 1992年3月)
- クロード・アネ『恋上手・口上手』 1955年8月, 新潮社
- ジャン・ラルテギ編『戦争と世界の青春—全世界戦没学徒の手紙』 1956年5月, 講談社(ミリオン・ブックス)
- ピエール・ロチ『青春』 1956年1月, 河出書房(河出文庫)
- ヴァン・デル・メルシュ『自由なき女たち』 1956年10月, 講談社(ミリオン・ブックス)
- ジュール・ロワ『不貞の妻』 1957年5月, 講談社(ミリオン・ブックス)
- ピエール・イシャク『密林の狩猟者』 1958年9月, 新潮社(人と自然叢書)
- ギ・ド・モーパッサン『女の一生』(原文対訳) 1958年9月, 大学書林
- ロベール・エスカルピ『文学の社会学』 1959年3月, 白水社(文庫クセジュ)
- ネ・ピュイセソ『今宵カリブ海に死者いずべし』 1959年4月, 講談社
- ジャック・ギェルム『寿命』(有沢誠共訳) 1960年3月, 白水社(文庫クセジュ)
- トニ・マイエール『イギリス人の生活』 1960年7月, 白水社(文庫クセジュ) (改訳新版, 1991年12月)
- ジュウベエル「随想録抄」(『世界人生論全集』第9巻) 1963年12月, 筑摩書房
- アンドレ・モロワ『初めに行動があった』 1967年4月, 岩波書店(岩波新書)
- 『フォンテーヌ詩抄初雪』(原文対訳) 1967年10月, 第三書房
- 『アミエルの日記—わが魂の遍歴』 1968年12月, 社会思想社(現代教養文庫)
- 『人生の思索—フランス・モラリストの言葉』(関根秀雄共訳編) 1969年5月, 社会思想社(現代教養文庫)
- 『美と悪と憂愁と—ボオドレエルの言葉』 1971年1月, 社会思想社(現代教養文庫)
- ピエール・デュラン『人間マルクス—その愛の生涯』 1971年6月, 岩波書店(岩波新書)
- ジルベール・ガヌ『わが愛する猫の記』 1973年5月, 潮出版社(のち文庫版, 1985年4月)
- アナトール・フランス『エピクロスの園』 1974年9月, 岩波書店(岩波文庫)
- アベル・ボナール『聖性の詩人フランチェスコ』 1976年8月, 白水社
- アナトール・フランス『神々は渴く』 1977年5月, 岩波書店(岩波文庫)
- アベル・ボナール『恋愛論』 1978年8月, 白水社
- ニコラ・セギュール『知性の愁い—アナトール・フランスとの対話』 1981年11月, 岩波書店(岩波文庫)
- アンリ・トロワイヤ『ロシヤ文豪列伝』 1983年1月, 白水社
- オクターヴ・オブリ編『ナポレオン言行録』 1983年9月, 岩波書店(岩波文庫)

ルイ・ベルトラン『王朝の光と影—ルイ大王の恋愛生活』 1984年5月, 白水社
ミリアム・アリ『クレオパトラ物語—エジプト女王秘話』 1986年8月, 白水社 (のち白水
Uブックス, 1991年10月)
ジョルジュ・ルノートル『ナポレオン秘話』 1988年1月, 白水社 (のち白水Uブックス, 1991
年8月)
ヴァン・デル・メルシュ『砂丘の密輸入者』 1990年8月, 白水社
アベル・ボナール『友情論』 1996年12月, 中央公論社(中公文庫) (のち新装復刊, 1997
年10月, 白水社)

編著 (フランス語教科書。各巻, 解題・注付)

『ジュウベール抄』 1935年9月, 白水社
『ルネ・バザン短篇集』 1939年1月, 白水社
ラフカディオ・ハーン『日本人の微笑』(仏訳) 1940年5月, 大学書林
ジョルジュ・デュアメル『鍛錬の学校』 1943年12月, 大学書林
グザヴィエ・ド・メーストル『コーカサスのとりこ』 1952年4月, 第三書房
コペ短篇集『三つの恋物語』 1953年2月, 第三書房
ジュール・デュアメル『雲に向って語る』 1953年4月, 大学書林
ジェラルド・ド・ネルヴァル『シルヴィーヴァロアの思い出』 1954年3月, 第三書房
『初級読本美しいフランス語』 1954年3月, 第三書房
デュマ・フィス『椿姫』 1954年9月, 白水社
アンドレ・モロワ『フランスの横顔』 1957年2月, 白水社
フランソワ・コペ『鐘とリラ』 1959年1月, 大学書林
モーパッサン短篇集『小さな兵隊』 1960年1月, 白水社
『フランスへのお誘い』(選文読本) 1960年2月, 第三書房
『みんなのフランス語読本』 1961年3月, 第三書房
『パスツール抄』 1962年2月, 白水社
モリス・トエスカ『純白の日々』 1962年2月, 第三書房
アルベール・シュヴァイツァー『水と原始林のあいだに』 1965年2月, 白水社
モリス・トエスカ『パリの雀』 1965年10月, 朝日出版社
クロード・ファレール『イスタンブールに死す』 1966年4月, 朝日出版社
モリス・トエスカ『わが愛する猫の記』 1966年10月, 朝日出版社
アンドレ・モロワ『愛と苦闘と創造と—ロマン・ロランの生涯』 1967年2月, 第三書
房
『明解フランス語読本』 1968年3月, 第三書房
マルセル・パニョル『若き日の思い出』 1969年2月, 第三書房
ジョルジュ・ルノートル『人形』 1969年3月, 大学書林

ラフカディオ・ハーン『怪談』(仏訳) 1971年2月, 三修社
アナトール・フランス『友の書』 1972年2月, 三修社
アルベール・フィリポネ『せせらぎの歌』 1973年3月, 三修社
アンドレ・モロワ『現代世界における作家の役割』 1976年1月, 白水社
アンドレ・トゥリエ『シクラメンの少女』 1982年3月, 白水社